



日野町地域おこし協力隊活動記



日野町では、平成27年度から谷口智哉さんと鵜瀬ゆりさんの2名が地域おこし協力隊として活動しています。

このコーナーでは、地域に根ざし、新たな風を吹き込む隊員とその活動、想いを紹介します。



うのせ 鵜瀬 ゆりさん

日野町へ来て衝撃を受けたことの一つ、上野田と里口の「火振り祭」でした。祭の直前までバスが通っているような道を松明が百数十本も通り、最後には松の木めがけて投げ上げる…

日野の食文化と近江日野商人ふ



たにくち ともや 谷口 智哉さん

8月3日、日野公民館で日野町社会福祉協議会主催の「ちいきふくし講座」の第一回が開催されました。依頼のあった講演では、支え合う地域づくりのヒントになればということでしたので、今までとは違う視点で日野町を知ってもらいたいと

思い、参加者152名とスタッフの方に、私の作成した「近江日野まち検定 初級編 B A C E 30」と題した日野まち検定でも基本問題となる30問を受けていただきました。今回の参加者は、町内の福祉協力員をはじめ、福祉等に興味があり、地域活動に積極的に参加されて



るさと館で活動する「日野の伝統料理を継承する会」を知っていたきたい、さらに昨年、祭を見て受けた衝撃を他の方にも体験して欲しいと思いい、8月14日に「火振り祭体験ツアー」を企画しました。町外からの参加者は数名でしたが、町内の参加者として、15名の方が祭を体験しました。参加者からは「火を扱う祭りは初めてで驚きもあったが楽しかった。何より日野の方々が温かく迎えてくださって心も温まりました。いい経験になりました」とお声をいただきました。

いる方が多いので高得点の方が多く、問題作成段階から多くの方に受けていただいておりましたが、今回初めて全問正解の方がお一人いらっしゃいました。検定を機会に町内の魅力等を再発見するきっかけになればとても嬉しいです。今後いろいろなところで「近江日野まち検定」を実施していければと思います。ご依頼いただきましてお伺いして、皆さんに問題を解いていただいた後、答え合わせや解説もさせていただきますので、お気軽にお声掛けください。

本来であれば地域の神事で、外部の人は参加することができませんが、上野田・里口の皆様に「ご助力いただき、無事にツアーを実施することができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。」日野町には多くの伝統行事が受け継がれていますが、これを通して町内外の方が日野の良さを見直すきっかけとなって欲しいです。



各団体などから隊員へ講演などを依頼される場合は、事前に役場商工観光課までお問い合わせください。

隊員の活動は、日野町ホームページでも確認できます。

これからも地域で活躍する地域おこし協力隊にご期待ください!

問い合わせ先 ◆ 商工観光課 商工観光担当 ☎0748-52-6562

温故知新

日野町には多くの物語が伝わっています。その物語の中で、歴史の一部として信じられ、語り継がれてきたものが伝説です。その中には、長い年月の中で内容が変わったものや、忘れ去られていったものもありました。今回は、そうした伝説の一例を紹介いたします。

「姫とダマの木」の伝説

上迫には、「戦国時代、上迫城が落城した際に姫が自害し、これを哀れに思った村人が姫を埋葬して、墓標としてダマ(タブノキ)を植えました。やがて大木となり、村人に切り倒され眞龍寺の薪としたところ、寺が全焼してしまいました。村人は姫の祟りと考え、怒りを鎮めるために新たにダマの木を植えました。」という伝説があります。現在、その木は町道改修で伐採され、代わりに「姫塚」の石碑があるので、ご存知の方も居られることと思

います。一説には姫ではなく遊女の墓とも言われますが、迫谷を舞台とした合戦があったのは事実です。



姫塚(上迫)

寛正二年(一四六一)、蒲生貞秀は、儀俄一族の三木氏の城である下迫城を攻めますが、蒲生氏が敗れたという記録が残ります。この時、上迫城で戦が行われたかは不明ですが、上迫に戦火がおよび、姫とダマの木の伝説にあるような状況が生まれた可能性があります。一方、四百年以上も前の上迫に關

近江日野商人館(大窪)、近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」(西大路)の開館時間は、午前9時から午後4時まで、休館日は毎週月・火曜日、祝日の翌日、年末年始になります。入館料は、大人個人三〇〇円、大人団体(三〇名から)二五〇円、小・中学生一二〇円です。ぜひご来館ください。

する記録の中に、この伝説に似ながら、現在は伝わっていないお話がありました。

「上迫城の怨霊」の伝説

天正四年(一五七六)に、京都の吉田神社の神官であり、多くの公家や武家と親交のあった吉田兼見が残した日記に、次の文があります。

「江州蒲生郡日野上迫儀俄家督、十八才成、令上洛、来云、三代以前令生害下女、依其怨霊、三代以来家督早世、殊衰微成、以或僧祝神」

要約すると、「上迫の儀俄家の三代前の当主が、下女を殺した。その怨霊によって三代前から当主が早世している。十八歳になる現在の当主は、同じようにならないように、ある僧に下女を神として祀ってもらった。」というものです。実は、同様の話が彼の日記に複数登場します。一般的

な伝説だったとも考えられます

が、姫とダマの木の伝説と一致する点があり興味深いです。

迫谷を支配した儀俄氏

さて、日記に登場する儀俄氏は、藤原(蒲生)五郎俊光(満)を祖とする蒲生氏の一族で、記録上は「蒲生」を名乗っていました。弘安六年(一一八三)の記録には、最も広く本拠地と考えられる「迫」や必佐郷の他、「甲賀上郡儀俄御庄下司職、同名田・名島・屋敷・山野・所従等」とあり、所領は蒲生、甲賀の両郡におよびました。建武元年(一三三四)頃には「儀俄」を名乗り、明德三年(一三九二)には、近江国の守護代に任じられるほどになりました。その後、儀俄氏に関する記録は応永十五年(一四〇八)以降、見られなくなり、永禄九年(一五六六)七月には迫地域を支配していた記録が残ります。さらに天正四年には、上迫に「儀俄橋六」が住んでいたことが確認できることから、儀俄氏の支配が続いていたと考えられます。それから四百年以上経た現在、「姫とダマの木」の伝説だけが残り、物語が変化したのか、別の物語があったのか結論は出ませんが、伝説も歴史を紐解く上で、有意義な資料であるという一例です。